

英語教材としての幼年文学作品の可能性  
—Anne Fine 作 *The Jamie and Angus Stories* を一例に—

多 田 昌 美

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第53号抜刷）

論 文

## 英語教材としての幼年文学作品の可能性 — Anne Fine 作 *The Jamie and Angus Stories* を一例に —

The Use of Literature for Young Children as English Teaching Materials

— in case of *The Jamie and Angus Stories* by Anne Fine —

多 田 昌 美

キーワード：英語教育、幼年文学、英語教材

### はじめに

大学での英語教育において、文学作品は評論や時事問題を扱った記事などと並んで読解の教材として用いられてきた。その多くは有名作家の作品（及びその一部）であったり、エッセイであったりする。（南雲堂や三修社等の目録による。）また、英宝社の『フィリパ・ピアス珠玉選』『熊のプーさん物語』など、児童文学作品を取り上げたものも見受けられる。こういった作品では、プロの作家による言語表現の巧みさや、そこに描かれた人間の心の機微に接することができるため、理論的思考で読み解いてゆく評論文や解説文とは違った形で言語表現の豊かさに接することができる。

しかし今日、大学生の英語能力のレベルは必ずしも高くない。元来ネイティブ・スピーカーの大人を読者対象とした文学作品では、作者が表現に工夫を凝らした結果、語彙が幅広かったり、比喩表現が多様であったり、文の構成が複雑であったりする。これらは本来は作品の持ち味を生むものであるが、授業で用いた場合には学生の読解の妨げとなり、結果として学生は一つ一つの文の意味を追うのが精一杯で、作品を全体として読むことが難しくなることが考えられる。また作品の時代背景などの予備知識が必要な場合もある。児

童文学作品であっても、年長の読者を対象とした作品や、書かれてから年月のたった作品の場合には、多かれ少なかれ同様の問題が生じることがある<sup>1</sup>。

そういった事情を反映してか、絵本を年長の学習者に対しても教材として用いることが近年行われている。白須康子は「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」の中で、初学者向けの教材として絵本を用いることを提案しているし<sup>2</sup>、Laina Ho は大学での勉学に備えて English Center で英語力を磨く留学生を対象として行った英語教育で、絵本や児童文学を用いた実践を行っている<sup>3</sup>。確かに絵本は文章量が少なく、また読解の際に絵の助けを借りることができるため、英語力の高くない学習者にも読みやすいと考えられる。しかし一方で、絵本は *The Oxford Encyclopedia of Children's Literature* の “picture books” の項の冒頭で、“In the context of children's literature, picture books are a special kind of book in which the meaning is created and conveyed through the interaction of the verbal and the visual media.” と説明されているように、言語表現と視覚表現との相互作用の上に成り立つものであり、読解のためには文章を読み解くだけでは不十分で、絵及び絵と言葉の関連を読み解くことにも時間と注意力を費やす必要が生じる<sup>4</sup>。

そこで今回は、英語面及び内容面での理解が比較的平易であると考えられる英語圏の幼年文学作品に着

目した。幼年文学とは就学前から小学1～2年生を中心読者とする文学で、英語圏では、Penguin 社が A Young Puffin シリーズとして、また Random House 社の児童書部門である Doubleday 社が Corgy Pups シリーズとして出版しているものなどがある。こういった作品は文字が読めるようになった子どもが初めて一人で物語を読むことを想定しているため、文体も語彙も平易であり、作品自体も短く、そのため一つの文のみにとらわれず、物語を追いながら読み進めることが容易である。多くの場合挿絵が添えられており、理解の助けとなるが、文章のみで完結する作品であるため、読解時には英語に集中することができる。また、幼年文学作品も「文学」であるので、言語表現の面白さや、作中の人物の心の動きに触れることができるのは、年長の読者向けの作品と変わらない。また作品によっては、書かれた時代の社会の状況や文化背景についても、子どもの生活の中に生きているものとして実感できるものがある。さらに、幼年文学の特徴の一つとしてハッピーエンドで終わる作品が多く、読後感も良い。

本論考では、大学における英語教育の教材に適した幼年文学の一例として、Anne Fine 作 *The Jamie and Angus Stories* を取り上げる（以下本作品からの引用はページ数のみ記す）。これは2002年にロンドンの Walker Books から出版されたもので、2003年に Boston Globe-Horn Book Award<sup>5</sup> を受賞している（Fiction and Poetry 部門）。2007年には続編の *Jamie and Angus Together* が出ており、一定の評価と人気を得ていると考えられる。Anne Fine は、映画化もされた *Madame Doubtfire* (1987) など、年長の読者向けの作品から幼年文学まで40余の児童文学作品を書いている英国の作家で、子どもを取り巻く社会や文化の状況を踏まえ、ユーモアを交えて人間関係を描くことを得意としている<sup>6</sup>。本作品は人物造形や心の機微の描写など文学性においても見るべきところの多い作品であるが、今回は英文読解の教材という側面、文化理解の材料という側面の二つから、英語教材としての可能性について検討したい。

## 作品概要と英文の特徴

*The Jamie and Angus Stories* には6編の短編作品が収録されている。最初の“Dry-Clean Only”は、保育園に通う少年 Jamie がおもちゃ屋の店先で牛の縫いぐるみ Angus に一目惚れし、母親にねだってクリスマスのプレゼントに買ってもらう、という、Jamie と Angus の出会いを描いている。続いて、夜になっても眠りたがらない Jamie を描いた“Uncle Edward Teaches Angus to Jump”、Jamie のベビーシッター Flora の結婚式を描いた“Flora’s Wedding”、Jamie が寝る前に父親に自分の幼い頃の話をしてくれとねだる“Tell Me the Story”、Jamie の入院を取り上げた“Strawberry Creams”、そして最後に Jamie が大人の真似をして1日を過ごす話“The Perfect Day”という構成になっている。いずれも一つの話は15～20ページ（1ページは約55字（半角）×20行）だが、各話に挿絵が3～6ページ分含まれているため、実際にはもっと短い。

作品の冒頭は次のようになっている。

Jamie saw Angus staring forlornly out of the shop window. His silky coat looked smooth as bathwater and white as snow.

“Oh, please,” begged Jamie. “Please can I have him for my birthday?”

“Your birthday was last week,” Mummy said, trying to tug him past.

But Jamie wouldn’t budge. “Christmas, then?”  
(7-8)

ここから分かるように、短い文を重ね、会話を多用して物語を進める文体が用いられている。語彙も、“forlornly” “budge” 等は学生にとってなじみが薄いことも考えられるが、総じて平易な語が用いられている。

## 英文読解の教材として

### 1. 文法理解の材料として

英文読解の教材としてまず着目したいのが、平易な文体の中に重要な、あるいは学生にとって難しいと考えられる文法事項が含まれている点である。

#### ・関係詞

関係詞は日本語にはない品詞であり、英語では頻繁に用いられ、節と節の関連を考える上で重要な品詞であるが、その理解に際しては先行詞の確定・文全体の構造の把握等が必要になり、学生にとっては理解の難しい文法事項の一つである。

本作品における関係詞の用例をいくつか挙げてみる。

I've never put anyone to bed before. It'll be good to start with someone like you, who knows what he's doing. (24)

これは Jamie の叔父 Uncle Edward が Jamie の家にやってきて、なかなか寝に行かない Jamie を自分が連れて行こうと申し出る場面である。用いられている単語自体は全て中学校レベルであり、“who” “what” という語の用法に注意を集中することができる。

また、次のような文もある。

“And is it *true*,” he [=Jamie] asked, “that grown-ups prefer to stay on the path in the park. . . ?”

“All true,” said Mummy. “Unless you're counting Uncle Edward as a grown-up, which personally I wouldn't.” (96、斜体は原文のまま)

ここで用いられている “which” は、単語を先行詞とするのではなく、“counting Uncle Edward as a grown-up” という句を先行詞としている。学生には馴染みの薄い用例だと思われるが、こちらも平易な語で交わされる

会話の流れの助けを得て、“which” のこの用法を理解することが容易になるだろう。

#### ・仮定法

仮定法は、動詞の時制や助動詞の用法と実際に表現されている時間（現在の話か過去の話か、等）の關係に習熟する必要がある、これも学生にとって理解が進みにくい表現方法である。

“I'd give you one of my chocolates,” Mahailia told Jamie afterwards. “But I'm keeping the last ones specially for the day when they tell me I can go home again.” (76、下線は論者による)

これは入院した Jamie が同室になった少女の発言である。冒頭の “I'd” は読み流してしまいそうな部分だが、実はここが仮定法になっている。この “'d = would” を、控えめな表現と解し、「チョコレートをあげるわ」だと思って読み進むと、“But...” 以下にきた時に意味が通じなくなる。ここで学習者は “would” について誤解していたことに気づかされるのである。さりげない、しかし読解の上では重要な仮定法のよい例である。

また、他の例として、

So I did what anybody would have done, Angus. (66)

という表現もある。これは Jamie の父親が Angus に向かって、Jamie がベビーバギーに乗るのを卒業した日の事を語る場面である。こちらも “if” を伴わない仮定法の例だが、日常の場で仮定法がどのように用いられているのか、その自然な実例に接することができる。（なお、助動詞 would に関しては、婉曲・will の過去形・熟語表現など、多様な用法があり、理解を深める際にはそれぞれの例に繰り返し接することが重要であるが、本作品にも（本論冒頭で引用した）“But Jamie wouldn't budge.” <どうしても～しようとしなかった> など、他の意味で用いられている場面があり、比較することで “would” の用例に親しむことができる。）

他にも、“it” “one” “that”などの指示語や、繰り返しを避ける省略など、文章の流れを理解するうえで確認しながら読みたい表現の例も多数見られる。このように本作品には、学生にとって英語学習上有益な文例・用例を多数見出すことができる。

## 2. 英語表現の面白さ

英文の読解において重要なのは、文法事項の理解だけではない。Ho が指摘するように、表現そのものの面白さに気づくことも、英語を読む際の重要なポイントとなる<sup>7</sup>。

幼年文学作品の特徴の一つに、繰り返しの表現が挙げられる。本作品にも、同じ語句を繰り返すことで文章にリズムを生み出している例がある。

第4話は腹痛を起こしたJamieが入院する“Strawberry Creams”という話だが、この冒頭のページには腹痛を起こしたJamieに対し、大人達がお腹を押しながら“Where, exactly?”と尋ね、Jamieが“Ouch!”と叫ぶやりとりが3回出てくる。また、第3話の“Tell Me the Story”では、父親がJamieのことを冗談で“a great big fat lazy tub of lard”と呼ぶ。比喩表現としても面白いこの表現を、父親は何度も（時にはJamieも）繰り返している。繰り返しは文体にリズムを作るのみならず、すでに理解した表現に再度出会うことでもあるので、読解の助けともなる。

また、短い言葉のやり取りがリズムを生んでいる例もある。

“You’re not peeping, are you?”

“No,” Jamie lied.

“Yes, you are,” Uncle Edward said. (31)

これは“Yes” “No”の使い分けという、理屈は理解していても、とっさの判断には迷うことのある会話表現だが、実際のきびきびしたやり取りを見ると、実感を持って“Yes” “No”の語感を感じ取ることができる。以上のような、リズムカルな表現、ユニークな比喩表現なども、生きた英語を味わう経験をするとい

う意味で、学生にとっては貴重な体験となるだろう。

## 文化背景理解の材料として

先に、Anne Fine は子どもを取り巻く社会や文化の状況を踏まえた作品作りが巧みであることを指摘した<sup>8</sup>。それは本作品においても同様である。先の項で取り上げた“Strawberry Creams”には、現代イギリスにおける性役割の変化と多文化社会の状況がさりげなく描かれている。

入院したJamieの主治医はDr Helenという女医である。彼女は研修医を指導する立場でもあるようで、彼女に連れられた研修医が大勢Jamieの病状を見に来る場面がある。その時の様子は“There they all were: short doctors, tall doctors, pink doctors, brown doctors, lady doctors, men doctors, cheerful doctors, worried doctors.” (82、下線は論者による)と述べられており、人種も性別も多様な医師がいることが示唆される。さらにJamieと同室の女の子はMahailiaという英語系ではない名まえを持ち<sup>9</sup>、彼女の所有するぬいぐるみにはNafisaという名が与えられている。MahailiaはJamieと一緒にトランプをするなど交流を持ち、彼女が退院する日のために取っておいたチョコレート(Strawberry Cream)をJamieが夜中にこっそり取って食べてしまったことから物語が展開する。主人公Jamieとは異なる文化背景を持つと思われるMahailiaは、この物語のキー・パーソンの一人なのである。

この特徴は同じく子どもの入院をテーマにした、Margaret E. ReyとH. A. Reyの『ひとまねこざるびょういんへいく』(1966)と比較するとより明確になる。『ひとまねこざるびょういんへいく』で名まえ（もしくは「市長」といった肩書き）を与えられている人間の登場人物は、さるのジョージの保護者である「きいろいぼうしのおじさん」から患者の子どもまで8人いるが、全て白人なのである。黒人も絵には登場するが、物語の展開に関わる役は与えられておらず、いわば背景の一部となっている。また人物の性別について見てみると、市長も院長も他に数人登場する医師も全て男



性であり、一方看護師や子ども室の世話係は全て女性である。こういった描き方は作品の書かれた1960年代という時代の制約を受けたものだったと考えられるが、固定された性役割や白人優先の発想を明確に認めることができる。

*The Jamie and Angus Stories* には他にも、Jamie の祖母が大学で美術を教えているという設定になっていた(59)、母親が書類を前に忙しくしている場面が描かれたり(94、なお同じ時間、父親はテレビを見ているという設定になっている)など、旧来の性役割にとらわれない人々のありかたを見ることができるようになっている。また、英国の子どもをめぐる慣習として、夜に両親が忙しいときにはベビーシッターが Jamie の面倒を見に来るということも描かれている(41)。

こういった点は物語の展開自体には影響しない部分である。しかし英国の文化・社会の理解という点から考えると、現代の状況が生きた姿で描かれていると言うことができ、こういった場面に接することで、英国の子どもをとりまく現状への関心と理解を促進する効果があると考えられる。

## おわりに

幼年文学作品の英語教材としての可能性を、*The Jamie and Angus Stories* を例に考察してきた。その結果、「読みやすさの中に文法事項の要点を含む」「繰り返し等の言語表現の面白さを実感できる」「生きた社会状況・文化背景に接することができる」という、英語教材としての長所を備えていることを明らかにすることができたと考える。

ところで、幼年文学作品を、本来の読者対象として想定されていない大人の学習者に対して用いる場合、はたして興味を持って読めるのかという危惧もあるだろう。実際 Ho は大人の英語学習者に対して児童文学作品を用いる際の限界として、読者が登場人物に共感を示しにくい点を挙げている<sup>10</sup>。しかし、今回取り上げた *The Jamie and Angus Stories* で言えば、寝る時間になってもなかなか眠ろうとしない Jamie と寝かせよ

うとする周囲の大人との駆け引きや、無理してでも大人の真似をしようとする Jamie の様子などは、学習者も似たような経験を持つことと思われ、そういった体験を思い返しながらか、Jamie の気持ちや周囲の人々とのかわりを追体験することができるのではないだろうか。何より、いかに学習者と同年代の人々の心境を巧みに描いた作品であっても、英語表現のハードルが高ければ、学習者が作品世界に入ることは難しい<sup>11</sup>。むしろ平易な、かつ生きた英語を、物語の流れを意識しながら読み進めることの方が、そこに描かれた人々と彼らを取り巻く状況に触れるという、文学作品ならではの読みを可能にしてくれるものだろう。

この「平易でありながら英語の読解力を伸ばし、人間理解・文化理解を促進する」という点は、本作品のみにとどまるものではなく、他の幼年文学作品にも共通するものと考えられる。他作品についても同様に検討を加えてゆき、幼年文学の英語教材としてのさらなる可能性を探ることや、実践に向けたプログラム作りを今後の課題としたい。

## 註

<sup>1</sup> 例えば先述の『フィリパ・ピアス珠玉選』には、伏線があちこちに敷かれた短編作品が多く収録されているため、作品全体を意識しての読解が欠かせないが、実際に授業で用いた場合には、残念ながら文レベルでの理解が精一杯であった。

<sup>2</sup> 白須康子「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」『人文研究：神奈川大学人文学会誌』Vol.154. (2002)

<sup>3</sup> Laina Ho, "Children's Literature in Adult Education" (*Children's Literature in Education*, Vol. 31, No. 4, 2000) .

<sup>4</sup> 例えば Beatrix Potter 作『ピーターラビットのおはなし』では、文章では「マクレガーさんは、くろなきどりをおいはらうのに つくったかかしに ピーターの小さなうわぎをきせ、くつをはかせました」としか書かれていないが、同ページの絵には、黒鳴き鳥が案山子の足元に集まっている様子が描かれており、案山子は鳥を追い払う役には立たなかった、という文章にはない情報が絵に盛り込まれている。

<sup>5</sup> 1924 年以來児童文学の論考や書評を掲載した雑誌 *The Horn Book Magazine* を出版している The Horn Book 社と、Boston

の新聞社である Boston Globe 社が 1967 年に設立した児童文学を対象とした賞。Picture Book, Fiction and Poetry, Nonfiction の三部門があり、米国における児童文学賞の中でも権威ある賞の一つとされている。

<sup>6</sup> *The Oxford Encyclopedia of Children's Literature* に “what sets Anne Fine apart as an outstanding children’s writer, and partly explains her huge appeal to children, is the way she finely balances the serious issues of her novels with characteristic “wit,” “humor,” and “sparkle,” terms with which her novels have been critically acclaimed.” とある。

<sup>7</sup> Ho, p. 263.

<sup>8</sup> 親の再婚問題を扱った『ぎよ目のジェラルド』(1989)、ジェンダー問題を取り上げた *Bill's New Frock* (未訳、1989)、子どもを取り巻く危険をテーマにした *Stranger Danger?* (未訳、1989) などがある。

<sup>9</sup> 挿絵では Mahailia は黒人少女として描かれている。

<sup>10</sup> Ho, p. 270.

<sup>11</sup> Ho の場合は対象が留学生であり、学習者はある程度の英語力の素地を備えていたと考えられる。

*Children's Literature*. (ed. by Jack Zipes) Oxford UP, 2006.

白須康子「中学校の英語教育における絵本・児童文学の活用」『人文研究:神奈川大学人文学会誌』Vol.154 (2002) . pp. 83-111.

Wilkie-Stibbs, Christine. “Anne Fine.” *The Oxford Encyclopedia of Children's Literature*. (ed. by Jack Zipes) Oxford UP, 2006.

## 使用テキスト

Fine, Anne. *The Jamie and Angus Stories*. London: Walker Books, 2002.

## 参考文献

Fine, Anne. *Jamie and Angus Together*. London: Walker Books, 2007.

ビアトリクス・ポターさく・え『ピーターラビットのおはなし』(新版) いしいももこ やく 東京:福音館書店、1988 (原書 1902)

マーガレット・レイ文 H. A. レイ絵『ひとまねこざるびょういんへいく』光吉夏弥 訳 東京:岩波書店、1968 (原書 1966)

Ho, Laina. “Children’s Literature in Adult Education.” *Children's Literature in Education*, Vol. 31, No. 4, 2000. pp. 259-271.

向井清、吉山京子「国際理解教育における外国童話（絵本）の活用」『鳴門教育大学大学院教育実践センター紀要』16 (2001) . pp. 153-58.

Nikolajeva, Maria. “Picture Books.” *The Oxford Encyclopedia of*